

5 府内小中学校のキャリア教育実践事例 「主体性を育み、社会参画につながるキャリア教育の取組み」

～一人ひとりが輝く元気な学校 ふるさと 赤阪小学校～

千早赤阪村立赤阪小学校

【本校の児童生徒の現状と課題】

千早赤阪村は大阪府唯一の村であり、府南東部の金剛葛城山麓に位置している。府内最高峰の金剛山を擁する風光明媚な村、また楠木正成の本拠地として親しまれてきた自然豊かな地域である。



千早赤阪村には以前、学校の規模はそれぞれだったが、小学校が4校あった。村の人口の減少とともに児童数も年々減少し、現在は本校赤阪小学校と千早小吹台小学校の2校になった。

教職員は子どもたちに金剛山麓の自然豊かな千早赤阪村のよさや縦割り活動を重視した学校の取組みを大切にもらいたいという思いを持っている。

現在千早赤阪村には2つの小学校と1つの中学校があり、3校の児童・生徒の交流はもちろん、教職員の交流も積極的に行っている。就学前には同じこども園に通っている子どもが多い。中には義務教育の9年間よりも長くとも過ごす子どももいる。



赤阪小学校の児童数は70名弱で、全学年が単学級であり、1学年9名～14名の小規模校である。児童数が少ないため、伝統的に異学年での取組み“縦割り活動”を積極的に行っている。上級生が下級生に優しく、そして親切に関わる姿が多く見られ、あたたかい雰囲気の中で6年間を過ごすことができている。

教職員も授業を行う学年だけでなく、縦割り活動を通して、いろいろな学年の子どもたちに関わる機会が多い。保護者の方も学校行事に参加してくれたり、地域の方もそれぞれの地域であたたかく子どもたちのことを見守ってくれたりしている。

少人数の学校であるため、授業や行事では一人ひと

りの活躍の場が多くあり、毎年子どもたちはいろいろなことにチャレンジしている。あたたかい雰囲気の中でいろいろなことに取り組み、6年間にそれぞれのペースで成長していく姿が見られる。

一方、人間関係が固定化されたり、新しい環境への対応が苦手であったりすることは課題である。

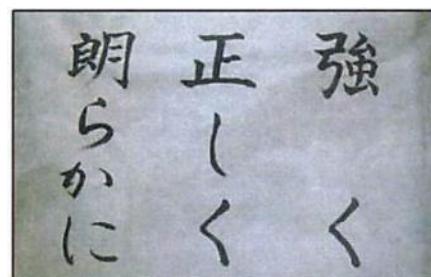
千早赤阪村での義務教育9年間は、互いを理解しあった仲間とともに過ごし、教職員や保護者を含む地域の方にあたたかく見守られながら過ごすことができるものの、中学校卒業後やその先を見据えると、小規模校の強みとあたたかい地域との関わりを活かしながら一人ひとりの自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる必要がある。そのために、「主体性を育み、社会参画につながるキャリア教育の取組み」を実施している。

【めざす子ども像】

本校の学校教育目標にはキャッチフレーズがあり、それが今回の実践事例の副題「一人ひとりが輝く元気な学校 ふるさと 赤阪小学校」である。

一人ひとりが大切にされることで、自信をもてるようになる。笑顔で輝ける学校環境をつくることで、「ふるさと」である千早赤阪村を誇り思う郷土愛を育んでいく。つまり、赤阪小学校での学びが子どもたちの人生の礎となることをめざしている。

また、赤阪小学校では、めざす子ども像として「強く」「正しく」「朗らかに」を掲げている。小規模校の特色を活かした学校づくりを通して、子どもたちの一人ひとりが輝けるように教育活動を行っている。



「強く」 …自力で、あるいは人と協働して、課題に対応したり問題を解決できたりする力

「正しく」 …社会をよりよくするためにはさまざま取り決めがあり、自分の判断や行動がその理にかなっているか、自分で考え、自分の言葉や態度で表せる力

「朗らかに」 …堂々と取り組み、失敗を糧にできたり、さらには失敗を避けられるよう十分な準備を心掛けたりする力

【キャリア教育で本校の子どもたちにつけたい力】

主体性を育み、社会参画につながるキャリア教育の取組みを進めるため、赤阪小学校では探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成している。

小規模校の特色を“強み”に変えて、一人ひとりの活躍の場をしっかりと確保したうえで、あたたかい雰囲気の中、まわりの子どもたちと一緒に考え、取り組むことを通して、主体性を育むことにつなげている。

【キャリア教育の取組みにおける教職員の思い】

令和4年度には千早赤阪村全体で郷土学プログラムを立ち上げ、さまざまな教科と関連づけて郷土学への取組みが始まった。さらに赤阪小学校では低学年では生活科の学習の中で、中学年と高学年では総合的な学習の時間の中で、年間を通してさまざまな取組みを進めしていくことを明確化した。

学校教育目標をもとに、小学校6年間でめざす子ども像を教職員で共有し、千早赤阪村に住む子どもたちが、この村を知り、この村を愛し、この村で生きることに誇りを持つ学習を進めていくことが重要であることを確かめた。

低学年では、千早赤阪村にある施設や地域人材を活用して取り組むことにした。



(1・2年生) 地域の方とのふれあいを大切にした活動（昔あそびや読み聞かせ）に多く取り組んだ。

また、中学年や高学年では系統立てた目標や学年テーマを設けることで、キャリア教育の充実にもつなげ

る取組みにすることができた。

(3年生の目標) 千早赤阪村のよさや特色について必要な情報を収集・整理・まとめる活動を通して、自分たちが住む地域に愛着と誇りを持てるようにする。



(3年生) 廃線となるバスに、横断幕を持って感謝の気持ちを伝えた。

(4年生の目標) 防災について必要な情報を収集・整理・まとめる活動を通して、身の回りにある自然災害の危険を知り、自分たちにできる防災や減災の取組みについて主体的・協働的に考えるとともに、それらを多くの人に伝え、生活に生かそうとする。



(4年生) 学んだことを生かし、各家庭で、避難時に本当に必要な物品と必要な量について考えた。

(5年生の目標) 環境問題について調べながら自分たちで解決に向けた取組みを考えるなかで、村内や校内など身近なところで実践可能があることに気づき、主体的・協働的に取り組もうとする。



(5年生) 環境を守るために、自分たちの身近な生活習慣を見直し、今すぐできることを他学年に発信した。

(6年生の目標) 村の観光イベント作りを通して、村の歴史・食べ物・自然という魅力に改めて気づき、そのよさをさまざまな人にどう伝えていけば効果的なのかということを主体的・協働的に考えるとともに、自慢したい村のよさをたくさんの人々に知ってもらうことでいつまでも村が存続するように、そして誰にとってもよい取組みになるように自分たちができることを考え実践しようとする。



【6年生における取組みの概要】

6年生では、大テーマとして「村って最高やん！『ウルトラ村（ソン）！』」と題して、1年間を通じてさまざまな活動に取り組んだ。

① 子ども観光大使に任命される

5月に6年生における取組みが本格的にスタートした。まず最初に校長先生から、実際に千早赤阪村で策定されている「千早赤阪村総合計画」について話を聞いた。

子どもたちは千早赤阪村に訪れる観光客を増やすため



校長先生から子ども観光大使に任命され、1年間かけて“村おこし”の企画を考える学習に取り組むスタートを切った。また、役場の方にも協力いただき、考えた企画のプレゼンテーションを聞いてもらえる機会があることを伝えられ、ひとまずの目標とした。



これから学習のコンセプトが「どんなことをすれば、観光客は来てくれるのかな？」に決まると、子どもたちは学習の課題が徐々に自分ごとになっていき、どんなことを考えるべきなのか、グループあるいは全体で熱心に意見交換をする姿が見られるようになった。

② 企画を立案する

1学期に千早赤阪村のよさをしっかりとと考えたり、いろいろな場所を見学したりした後に、観光客集客アップのための企画提案を考える学習が始まった。

「持続的に・誰でも・いつでも」をポイントに、郷土のよさを伝えるために、自分たちで考えつくことを出し合った。観光客の方に見てほしい観光コース案を作るなどの企画が出てきた。

観光コース案のふさわしい出発地やめやすの所用時間について学級全体で議論を重ね、子どもたちは理由や根拠を確認しあいながら、意見をまとめていった。

子どもたちからのアイデアの実現のために「自分たちだけでもできること」「役場の方にお願いすること」「専門の人にゆだねないといけないこと」などを整理

して、実際にコース巡りをする時には何をチェックすべきなのかも確認した。

また、修学旅行で訪れた観光地と千早赤阪村を比べてみて、似ているところやちがうところを見つけ、それらの情報の整理や分析をしながら、観光コース案の再考を行った。

コースや内容など新たな案を出し合うだけでなく、誰もが楽しめるように、また千早赤阪村に訪れた観光客にも自然を守ってもらえるような工夫について、学校だけでなく保護者や地域の方にもアンケートやインタビューを実施して、考えを広げていった。



千早赤阪村のオリジナルグッズがあれば、観光客にも喜んでもらえるという思いから、グッズの候補を考え、教職員から意見をもらうためにアンケートを実施した。



観光客に千早赤阪村のおいしい給食についても知ってもらいたいという思いから、栄養教諭にもインタビューしてレシピなどを教えてもらう。

1、2学期の取組みを通して、子どもたちは4つのテーマ「村クイズ」「村グッズ」「観光バス」「給食（体験）」について、役場の方に考えた企画をプレゼンテーションすることになった。

③ 役場の方に提案する

12月に役場の方に学校に来てもらい、子どもたちが考えた提案を行い、意見を聞かせてもらうことになった。役場からは秘書企画課、農林商工課、教育課の3つの課の担当の方が来られ、役場における



それぞれの立場から講評と助言を聞くことができた。

6年生は各企画のねらいや意義について堂々とプレゼンテーションを行った。例えば「村クイズ」の企画では、千早赤阪村の観光スポットを巡りながら、村の歴史や自然などのクイズを楽しんでもらい、参加賞をプレゼントすることを提案したり、「村グッズ」の企画では、千早赤阪村の木材を利用したグッズを作つてみることを提案したりしていた。



(村クイズ)



(村グッズの案 千早赤阪村の木材を利用したコップ)

今回、子どもたちが考えた企画に対しての役場の方から実現可能かどうかの助言を参考に、再度練り上げた提案を3学期に行うことになった。

④ 役場の方に提案するつもりが…

6年生の子どもたちが考えた「村クイズ」「村グッズ」「観光バス」「給食（体験）」について、実現に向けての可能性や課題についても、1回めの提案の際に教えてもらっていた。

1回めの提案の後、子どもたちで話し合い、「村クイズ」を中心とした企画にしぼり、その案を練り上げ、2回めのプレゼンテーションの準備を進めることになった。

2月には、再度子どもたちの提案を聞きに、役場から村長、副村長、教育長、秘書企画課長、教育課長が来られることになり、子どもたちは驚いていた。しかし6年生の子どもたちは緊張していたものの、落ち着いてしっかりと発表ができていた。

村長からの講評では、村の観光活性化案としての素晴らしさ、1年間コンセプトを軸に協力して考えてきた学び方の素晴らしさについて評価をいただいた。また、村の観光事情についてのお話をしていただいた。

授業後、1年間更新しながら廊下に掲示してきた資料も見てもらい、子どもたちにしかない観点で考えられていること、また千早赤阪村への愛着、郷土愛を感じることができることを高く評価された。

⑤ 「つけたい力」のふりかえり

1年間子どもたちが取り組んできた活動を、小学校生活最後の学習参観で、保護者の方へ企画の取組みについて発表をした。

子どもたちの発表では一人ひとりの個性が表れ、しっかりと話せていて、これまで身につけてきたことが十分に活かされていた。最後の参観で保護者の方に聞いてもらったことで、これまで1年間を通じて興味や関心を持ち取り組んできたことを振り返ることができ、自分の成長を実感することができるきっかけにもなった。この取組みを通して、自分たちで0から何かを作り出すために、話し合ったり、折り合いをつけたり、他者の意見を聞いたり、発信したりする経験ができた。

【成果と課題】

6年生の子どもたちは千早赤阪村に訪れる観光客を増やすという大テーマで、1年間を通じて主体的にさまざまな取組みを行ってきた。

千早赤阪村の小規模校の特色を“強み”に変えて、たくさんの方々にも関わってもらえることができた。それは、子どもたちにとっては千早赤阪村に関わる人にあたたかく見守ってもらいながら、社会へ参画する体験したことにつながっていた。

子どもたちが主体的・協働的に学ぶことができたことも大きな成果であり、今後の人生において大切な力となる。また、その姿を見て下級生たちにとって今後自分たちがめざす姿にもなっていた。

子どもたちの考えた企画は、少し形を変え実現したものもある。「村グッズ」で考えたデザインの一部は、千早赤阪村にあるホールの掲示物や役場の方の名刺に使われた。子どもたちが考えたデザインり、「給食（体験）」は取り入れた名刺事前に申し込みをすれば一般の方も試食できるようになつたりした。

今回は実現していないものの、近い将来、子どもたちが考えた「村クイズ」を使ったイベントが開催される日が来るかも知れない。その時は、ぜひクイズを楽しみながら千早赤阪村を観光していただければ幸いである。

千早赤阪村立赤阪小学校のH.P.

<http://www.chihayaakasaka.ed.jp/akasaka-elm/>



今回の取組みの様子もブログの記事で紹介されています。



千早赤阪村教育委員会事務局
(林立ぐすのきホール内)
TEL (直通) FAX

(子どもたちが考えたデザインり、「給食（体験）」は取り入れた名刺)